

公開授業研究会

河北中学校

## I 研究主題

生き生きと学び、自立に向かう生徒の育成(4年次)

## II 主題設定の理由

本校の学校教育目標である「つながりの中で自立する生徒の育成」を踏まえ、上記の研究主題を設定し、研鑽に励んできた。

本校の生徒は、素直さと真面目さを生かして、さまざまな活動に意欲的に取り組むことができる反面、先の見えないことに対して、失敗を恐れて指示待ちになったり、積極性に欠けたりする一面も見られる。こうした生徒の実態を踏まえ、学校全体で教科を通して育みたい具体的な「自立に向かう生徒の姿」を、

①課題意識を持ち、周囲とのつながりから学び、自己表現する生徒

②目標に向かって、自らの学びを振り返り、工夫・改善する生徒

とし、アクションプランを活用しながら、「自己調整力・レジリエンス」「思考力・判断力・表現力」「自己肯定感・他者理解」「コミュニケーション力」を相互に関連づけ、その具現化を目指すものである。

## III 研究の実際

### 1 研究の視点

研究主題に迫るために、以下の【視点】を重視して研究にあたる。

**【視点】表現力を高める言語活動の工夫 ～話す・書くを中心に～**

これまでの研究の成果を生かしながら、「表現力」に焦点を当て、研究を推進する。「表現力」の醸成には、主体性はもちろん、他者とのつながりや対話、振り返りによる自己調整力も重要な要素になると考える。また、それらを通して仲間との結びつきを強くし、自己肯定感の高まりも期待できると考える。生徒の目線に立って言語活動を見つめ直すことで学習意欲を喚起し、自ら考え、主体的に行動する力の醸成と生徒の表現力の向上を目指したい。また、強化ポイントとして「問い返し」を掲げ、表現力のさらなる深化へとつなげたい。

これまでも大切にしてきた「基礎基本の定着」を根底に置きながら、以上の【視点】を持って研究を進め、研究主題である「生き生きと学び、自立に向かう生徒の育成」に迫っていく。

## 2 授業参観とグループ協議の視点

授業を参観する際のポイントを「生徒の姿」に置き、表情や仕草、反応や発言から、考えの変容や深まり、成果や課題を見出していくことで、より「生徒」の目線に立った授業づくりを目指す。また、事後研究会の際には「①研究の視点に沿った授業づくりについて」「②『問い返し』について」の二つの視点で協議を進め、研究内容の深まりを目指す。

## 3 公開授業研究会

今年度の公開授業研究会では、各学年で一つずつ授業を公開した。たくさんの先生方に生徒の姿を見ていただき、その発言や様子から学びの広がりや深まりについてご意見をいただいた。

### (1) 3年生 社会科 単元名「消費生活と経済」

#### グループ協議でのご意見

#### ①研究の視点に沿った授業づくりについて

- 学級全体の雰囲気がよく、授業時のロールプレイや活動の積極性につながっていた。
- 前時までの知識を生かした（つながりが生かされた）発表になっていた。
- 社会科としての知識の定着が進んでいる発言や記述が多く見られた。
- ▲本単元は家庭科との関連が図られる部分もあり、まとめの際に教科での差別化をどのようにしていくのが課題である。

#### ②「問い返し」について

- 生徒同士の問い返しが活発でよかった。
- ▲教員からの問い返しをどのように仕組んでいくのが課題である。
- ▲先生と生徒の間での知識の確認や、授業後の意見の変容の確認する場があると良い。
- ☆ロイロを用いた共有に意図、意味を持たせたい。
- ☆問題事例のバリエーションを増やしたり、自由に課題を考えられたりするとより学びが深まると考える。

### (2) 2年生 道徳科 主題名「より良い社会を目指して」

#### グループ協議でのご意見

#### ①研究の視点に沿った授業づくりについて

- 心情円を用いたことで賛成—反対の0 or 100%でなく、多様な考えを持つことができていた。
- 途中でグループの構成を変えたのが良かった。より多くの考えを知る機会になった。
- 初めに提示した「社会の広がり」の図が効果的だった。
- 「カメラがないと守れないマナーって何なの？」という生徒の意見を取り上げたことで生徒の視点が社会に向かった。
- ▲個人で考えた後にペアで意見を交換するなど考えを語る機会がさらにあった方が良い。
- ▲完全に100%にならない理由をもっと深めさせたかった。中間の考えを引き出したかった。

☆カメラの有無の善し悪しで終わらずに、最初に提示した「社会の広がり」の図に戻って社会と自分に目を向けさせると良かったのではないかな。

☆マンションの防犯カメラだけではなく、もう一つプライバシーが侵害される例などの資料があればより多面的な考えを引き出せたのではないかな。

☆ルールの監視とマナーの監視の違いが生徒の中ではっきりしていなかった。ここを押さえておくにより身近な自分事として考えられたのではないかな。

☆グループワークの必要感がほしかった。賛成でも100%にならない理由等を交流させると良かったのではないかな。“モヤモヤ”を言語化させたかった。

## ②「問い返し」について

○問い返しを意図的に行ったことで、生徒の考えの変容と成長が見られた。

▲カメラの有無から住みよい社会へ目を向けられるような問い返しがあると良かった。

☆生徒同士の問い返しがあればよかった。それを生み出せるようなグループ交流の工夫があると良い。

## (3) 1年生 音楽科 題材名「だれもが気持ちよく過ごせる社会を目指して」

### グループ協議でのご意見

#### ①研究の視点に沿った授業づくりについて

○音楽的特徴を意識させながら「推しポイント」を書かせるという課題は、生徒の意欲を引き出す良い課題設定だった。

○ICTの活用や教材の工夫がたくさん見られた。タブレットで一人ひとり楽曲を聞いたり楽譜に○分△秒と書いてあったりする等、生徒が音楽に集中する支援が豊富だった。

○グループで自由に発言しあうことができる学級の雰囲気素晴らしかった。

▲タブレットで自由に楽曲を聴くことができる工夫はよかったが、音が混ざって聞きづらそうにしている生徒もいた。可能ならばイヤホン等を用いてより聞き取りやすい環境を整えられるとよかった。

▲鑑賞のポイント（音色・旋律・強弱等）を明確にすることで、生徒たちはもっと考えやすくなったのではないかな。

#### ②「問い返し」について

○先生の問い返しがとても有効に機能していた。生徒から吸い上げた意見を、「どう思う？」「もう一回グループで話してみて」等、全体に戻す場面がとてもよかった。生徒の考えが深まっていた。

○問い返しによって、生徒が自分の考えを言語化していく過程がみられた。

▲生徒の意見の共有方法を工夫するともっと良かった。「生徒→教師→全体」の流れだけではなく、「生徒→全体」や、ロイロノートを活用して共有するなどするとより考えが深まったのではないかな。

▲友達と意見を共有したときに、自分の考えが変容したり、新たに気づいたことがあったりするとさらに良かった。

## IV 成果と課題

- 多くの先生方から授業を見ていただき、校種・教科横断的な視点での情報交換ができた。
  - すべての学年を公開したことにより、生徒の成長の過程を見ていただくことができた。
  - 授業参観の視点を焦点化したことで、教師側の視点と生徒側の視点を比較しながら、より「子どもを中心に置いた」改善の手立てを検討することができた。
  - 小学校での学習活動や学習習慣について情報を得ることで、中学校とより密接に連携がなされ、さらなる力の上積みにつながると感じた。
- ▲小学校での実践や、多様な視点からの意見は大変学びの多いことであった。さらなる力の高まりや、力の上積みのために、「小と小」「小と中」の交流をさらに深めていければと感じた。

(高橋 拓也)



# 学校研究

## I 研究主題

### 自ら学びをつくる子どもの育成（４年次）

— 子どもが主体的に学ぶ授業・学級づくりを通して —

## II 主題設定の理由

本校では、「自ら学びをつくる」を、「主体的に対話を重ねて考えを深めること」「新たな課題に粘り強く取り組むこと」「子ども自身が学ぶ力を身につけていくこと」と捉え、３年間にわたり研究を進めてきた。困難な状況においても、自ら考え判断し、他者と協働しながら解決策を模索し、状況を切り拓いていく子どもの育成をねらいとしている。その基盤となるのは、多様性を認め合い、互いの表現を受容し合う学級集団である。本校では、主体的な授業づくりとあたたかな学級づくりを両輪として研究に取り組んできた。

一方、本校の児童は、自分の考えを相手に分かるように伝えたり、相手の意見を受けて考えを深めたりする対話の面には課題が見られる。また、少人数学級による人間関係の固定化から、自分の意見を抑えたり、判断を他者に委ねたりする傾向もある。こうした実態を踏まえ、対話を通して自分の考えを明確にし、仲間と協働しながら学びを深める力を育成する必要があると考え、本主題を設定した。

## III 研究の実際

### 1 研究の視点

- ①問いを起点とする学び
- ②対話を通して考えを深める
- ③思考を可視化する活動の設計
- ④振り返りによる内省と成長の実感
- ⑤自分ごととしてとらえる学びのデザイン



### 2 各学年の取組み

学年	教科と単元名	主な成果（○）と課題（▲）
一年	道徳「したいことがあるときには」	○役割演技を通して、かぼちゃの気持ちを考えさせることで、かぼちゃになりきって素直な気持ちを表現することができた。 ○導入で自分の体験談を聞くことで、自分ごととして考えることができた。 ▲子どもたちが葛藤するような問い返しができるようになった。
二年	図画工作「あきからのおくりもの」	○目的に応じて、自然とグループができたり、一人で取り組んだりするなど、子どもたち同士の関わりが生まれていた。 ○材料の色や形などに注目して、他のものに見立てたり形作ったりする様子が見られた。 ▲自然物を使うことがメインの活動になるよう、材料の吟味が必要だった。

三年	<p>体育 表現運動「表現の世界へLet' s GO！」</p> <p>○合同体育（3年・4年）を行ったことで、より多様なアイデアが生まれ たり、異学年交流を図ったりすることができた。</p> <p>○「体・空間・リズム・関わり」の4つのくずしを掲示したことで、表現の 工夫を考えたり、振り返る際の拠り所となったりした。</p> <p>▲振り返りの視点を共有しておく、学習の深まりが出たのではないか。</p>
四年	<p>社会「ごみのしよりと利用」</p> <p>○単元全体を貫く学習問題とともに、一人ひとりの追求したい課題を常時掲 示したことで、児童の学習意欲を継続し、「問いを起点とする学び」につ ながることができた。</p> <p>○個人ごとにタブレットを使用し、クリーンピア共立のごみ処理動画を視聴 したことで、個別化を図りながら、全体交流の際には、考えを深めるため の共通の資料とすることができた。</p> <p>▲「対話を通して考えを深める」ため、お互いの考えの相違点を「比較して いく精度」をあげる支援が必要であった。</p>
五年	<p>社会「自動車を作る工業」</p> <p>○単元の導入として、外国で日本車がたくさん使われている写真を用いたこ とによって、どのような学習をしていくのか見通しを持つことができた。</p> <p>○「先生が乗っている車」「家の人が乗っている車」の調査結果を提示した ことで、より身近な課題としてとらえることができた。</p> <p>▲様々な資料を提示したものの、資料の読み取りで終わってしまった。児童 のつぶやきや疑問を拾うことで、より深めることができたのではないか。</p>
六年	<p>家庭科「こんだてを工夫して」</p> <p>○献立を見直すポイントを示すことで、多様な視点で献立改善に向けた意見 交換ができた。</p> <p>○栄養のバランスや献立の全体像が明確になるようにワークシートを工夫し たことで、相手の考えを理解し共有しやすかった。</p> <p>▲誰のための献立なのかという相手意識を高めたり、グループでの献立作 り、見直しなどを取り入れたりすることで、より話合いの内容が広がり、 交流の深まりが期待できる。</p>

#### IV 成果と課題

- 児童が学習を自分ごととして捉え、主体的に関わろうとする姿が多くの授業で見られた。主体的な授業づくりとあたたかな学級づくりを両輪として研究に取り組んできた成果として、自分の考えを伝え合ったり、素直に表現し合ったりできる雰囲気が出来上がってきている。
- 活動の目的や見通しがはっきりしていることによって、子どもたちが自然と関わり合いながら、学習を進めることができるようになってきており、多様な考えや表現が引き出されていた。
- ▲対話を通して考えを「深める」という点においては、課題が残った。  
意見を出し合う活動は行われていたものの、子ども同士が自分と友達の考えの相違点に気づいたり、質問し合ったりすることを通して、考えをよりよいものへと深めていく段階までには至らない場面が見られた。  
今後は、対話を通して考えを深めていけるよう、必要な支援の在り方を検討するとともに、問い返しを行うなど、教師がファシリテーターとして果たす役割について、さらに研究を進めていく必要がある。

(大泉 晃子)

## I 研究主題

### 自ら学び続ける子どもの育成（6年次）

## II 主題設定の理由

### (1) 学校教育目標

ふるさとだいすき	・・・	ふるさとについて理解を深め 行動をする子ども
かしこく	・・・	主体的に楽しく学び よりよいものを創造する子ども
つよく	・・・	心身とも健康で ねばり強く取り組む子ども
やさしく	・・・	自他を大切にし 思いやりのある子ども

### (2) 昨年度までの研究から

本校では昨年度、各担任が目指す子どもの姿を明らかにしながら児童の実態に応じて個人研究テーマを設定して授業改善を行った。その結果、「課題を自分事として捉えて学習に臨んだ」「行事や学習に対してやってみたいと提案したり挑戦したりした」など一定の成果が見られた。その一方で、「より発展的な学習に取り組んだり創意工夫して表現したりする力が弱い」「学びが学級や学校で閉じてしまうことがある」という課題も残った。以上のことから、学校教育目標の具現化に向けた研究の方向性に間違いはないということ、児童の主体性を更に伸ばしていく必要があることが確認できた。

そこで、今年度も研究主題「自ら学び続ける子どもの育成」を継続するとともに、育成を目指す資質・能力の重点を「主体性」とし、各学級の担任が児童の実態に合わせて個人研究テーマを設けて研究に臨むこととした。さらに、つながる力を育てる「つなぐ教育」を意識し、自らつながる力を身につけるため、学び・人・地域とつなぐための単元づくりを考えて計画した。

## III 研究の実際

### 1年 国語科 おはなしをたのしもう「やくそく」

#### 研究テーマ めあてに向かって、みんなで学びを楽しむ授業づくり

<手立て①> 単元のめあてと学びのプランを作り、見通しをもって学習に取り組む

◇単元のめあて「おんどくたからばこをつくろう！」を設定したことにより、来年度の就学児や地区内の介護老人保健施設等で発表するため、意欲的に学習に取り組むことができた。しかし、初めて子どもたちと学びのプラン作りに取り組み、単元計画に加えて、つけたい力を共有することはとても難しかった。タブレットで自分の音読の姿を見ることにより、「上手に読めるようになりたい。」と、繰り返し音読練習をする姿が見られ、授業以外でも音読を楽しもうとする姿が見られた。

<手立て②> 会話を基にして詳しく読んでいくことを繰り返し、登場人物の気持ちを想像しながら読む楽しさを味わう。

◇会話文の話者を確認したことにより、だれが（主語）、どうしたのか（述語）をおさえることができた。この物語の会話文は、登場人物の気持ちを想像しやすい言葉なので、会話文を基にして、自分のことばかり考えている3匹のあおむしたちの気持ちを詳しく読むことに有効であった。しかし、本時は、前時とは違い、仲直りして「やくそく」するまでの場面を扱ったため、読み取りに様々な難しさがあった。

### 3年 総合的な学習の時間 だれでも楽しい動物園プロジェクト

#### 研究テーマ 問いをもって課題を設定し、地域や友達と学び合う子ども

〈手立て①〉 これまでの知識や体験から問いを見だし、課題設定するための提示や生活とのつながり

◇これまで学習してきたことをいつでも振り返ることができるように、学習してきたことをファイルやロイノートに蓄積したり、教室に掲示したりした。また、問いが生まれるような情報を提示したり、問い返しをしたりしたことで、付箋に問いをもったときにメモする児童も見られた。総合に限らず、他教科でも生活と結びつけながら問いを見い出して課題を設定し、主体的に取り組むことができた。

〈手立て②〉 地域や友達とつながり、互いのよさを生かすための場や明確な視点

◇目的や相手意識をもって学習するため、飼育員やお客さんの思いを聞き、願いや思いをもとに課題を設定した。目的や相手を意識しながら表現する力を身につけるために、発表する場を設けた。自分たちで考えたことが実現できたという達成感、地域の大人とつながりながら学習することの楽しさや大切さを実感することができた。一方、子ども同士で互いの考えのよさを生かして学び合うために、付箋を使って自分の考えをもった上で交流したり、フィードバックの視点を明確にしたりしたが、必要感のある交流や視点の精選が必要だった。

### 5年 算数科 図形の角の大きさを調べよう

#### 研究テーマ 根拠をもって自分の考えを表現し、みんなでつながる授業づくり

〈手立て①〉 根拠をもって考えを表現するための見通しとキーワードの掲示

◇導入で見通しを丁寧に示したことで、一人ひとりが自分の考えをもつことができた。また、説明するときのキーワードを掲示したことで、交流の際にそれらを用いて説明しようとしていた。例えば、四角形の内角の和を求めるために、対角線を2本引いて三角形4つに分けて考えた場合、「対角線」や「三角形」というキーワードを用いたり、中心部分の必要のない角度について「円」、「丸」という言葉を使ったりして考えていた。さらに、問い返しを多くしたことで児童の思考が刺激され、自分の考えを表現することにつながった。一方、全体交流やまとめ、振り返りの時間が十分に確保できなかった。

〈手立て②〉 みんなでつながるための交流の場の設定やタブレットPCの活用

◇個→ペア・グループ→全体に発展させたことで、全体でも説明してみようという自信につながったが、学ぶ時間を確保するのであれば、個→全体へとつなげる方法もあった。全体交流で教室の前方に集まる場を設定したことで、みんなで解決しようという意識につながり、子ども同士の言葉でつながっていた。タブレットは様々な試行錯誤ができ有効だった。ノートにも学習シートを貼り、学びの足跡として残すことができた。しかし、教師がヒントを与えずぎってしまった部分もあったため、適切な出と待ちが必要であった。

## IV 成果と課題

- 各担任がその学年や児童に合った研究テーマを設定したことで、実態に合った単元構成や課題を設定することができた。さらに、児童同士や異学年のつながり、地域とのつながりなどの単元構成や課題設定を児童と共に設定することで、児童が課題を自分事として捉え主体的に学習に臨む児童が増えてきている。
- ペアやグループ、全体で自分の考えを表現する活動を学年に合わせて繰り返し行ったことで、主体的に友達の意見や様子から自分の言葉で思いや考えを表現している児童が増えてきている。さらに力を伸ばせるよう、指導者側が適切な「出と待ち」を意識し、交流のねらいをもちながら児童が生き生きと学び続ける場の設定を心がけていく。
- ▲児童と共に課題設定や単元構成を考えて自ら学びを創ることを意図して取り組んできたが、まだ学びや交流に対する必要感が高まっていない。教師側が意図やねらいをもち、学びや交流を仕組んでいけば児童の主体性をより高めることができる。教師は児童に任せる場面を意識しつつ、児童同士の話し合いのスキルを高める指導を行うことも重要である。

(阿部 まな美)

## I 研究主題

仲間と関わりながら、学び方を身に付ける子どもを育てる  
 ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して～

## II 主題設定の理由

本校は「Challenge & Thinking ～前に踏み出し チーム力を高め 考え抜く中部の子」を学校教育目標として掲げている。この目標を具現化するために、二つの視点を意識して研究を進める。「仲間と関わりながら」では、自分で考えたことを意見交換したり、議論したりする場を流動的に設け、新たな考え方に気づき、自己の変容の自覚へとつなげる。小学校という小さなコミュニティの中でも、子どもたちは対話力を継続的に身に付ける必要があると考える。「学び方を身に付ける」においては、学び方のサイクルである《課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現》を生活の中の様々な場面で意識させていく。このサイクルが日常化し身近なものになり、実生活での課題解決や危機管理にも役立ち、自らの楽しみや幸せを生み出すサイクルにも有用ではないかと考え、授業・教材研究に取り組んでいく。

### <授業改善の主な視点>

- 課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方を身に付けるための工夫
- 課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫
- 自分や友達の良さや成長を実感できるための工夫

## III 研究の実際 7月計画指導訪問から、11月『単元でつながる授業研究』へ

『単元でつながる授業研究』（一つの単元を複数の教諭が一教時ずつリレー形式でつないでいく授業形式）

《ねらい》授業研究を授業力と学力の向上に結びつけるために、同一単元内で複数の指導者が授業をつないでいく授業研究を行う。複数で授業をつなぐことで、教材観を明確にもつことや授業力向上により自分ごととして取り組み、子どもたちの学力向上につなげることを目的に設定した。

《テーマ》深い理解を図る学び～資質・能力向上の授業を描く～その先には学力向上  
 4年算数「分数をくわしく調べよう～この学習を通して説明名人になろう」

第4学年の実践 算数「角の大きさ」 計画指導訪問事後研でのご指導をもとに

### <課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方を身に付けるための工夫>

- ・前時までの振り返りは児童に委ねる。本時でしっかり教えるところで教師が出る。
- ・児童のつぶやきを授業に組み入れることで、課題へより没頭して取り組むことができる。
- ・「考え方」を書くことは難しいので、何を書くかよい例示が必要である。

### <課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫>

- ・答えは間違っているが、考え方の方向性が正しい児童を取り上げ、どのポイントが違っているのか考える場面や児童のつまづきをみとり考えさせる場面を設ける。

### <自分や友達の良さや成長を実感できるようにするための工夫>

- ・振り返りはなぜ必要なのか、振り返ることの価値を児童と教師が共有しておくことで、振り返りの幅や深みが増す。

第4学年の実践 算数「分数をくわしく調べよう～この学習を通して説明名人になろう」

<課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方を身に付けるための工夫>

- ・夢中になって課題解決に取り組む姿
  - 授業開始時刻が徹底され、学習に臨む態度が改善された。
  - 授業中の私語が減少した。
  - ワークテストの点数が向上した。中間層に位置する児童が8～9割の得点を取ることができた。



<課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫>

- ・単元を通して育成を目指した力が、他単元・他教科にも波及
  - 算数科の面積を求める単元や国語科での学習（自分の意見を言語化する・相手の意見を聞く・聞いたことをもとに自分の考えを再構築する）において、必要感のある対話や協働する姿が見られた。



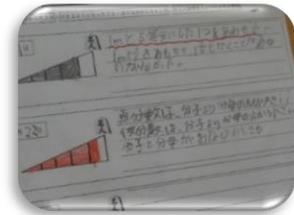
<自分や友達の良さや成長を実感できるようにするための工夫>

- ・視点を定めた振り返りとバロメーターの活用
  - 単元を通して振り返りの視点を定めたことで、全教時の振り返りに一貫性があった。
  - 児童も自分の成長をバロメーターと関連づけて、言語化することができた。



<単元でつながる授業を行ってみて>

- ☆他の先生方の問いかけ、時間配分、教材研究など多方面で学ぶことが多かった。
- ☆児童の実態が（担任外の教諭は）あまり分からない状況で、教材に重点的に目を向ける機会となってよかった。
- ◎教諭間での教材観の共有⇒児童の学習に向かう意欲の向上をもたらす一因ともなりうる。
- ☆算数科の系統性についての視点も持つことができた。
- ☆教員それぞれの個性（児童のつぶやきの取り上げ方、導入から課題へのつなぎ方など）が一つの単元内で見ることができ、大変勉強になった。



Ⅲ 成果と課題 今年度は計画指導訪問や早稲田大学小林宏己名誉教授通覧などご指導いただき機会に恵まれました。次年度の学校研究につなげていきたいと思っております。

- 教材に目を向けることで、教科の本質に迫ることができ、児童の変容につながった。
- 課題設定⇒情報収集⇒整理・分析⇒まとめ・表現の学びのスパイラルを身に付けた児童が、その学び方を他教科にも広げ、そこから深い学びへ近づいている。
- 学校教育目標の重点である「前に踏み出す力・チーム力・考え抜く力」の3つの力を意識した授業や振り返りを行ってきたことで、児童の意識が高まってきた。
- 単元をつなぐ授業づくりによる「自分ごと」が全体の授業力向上につながった。
- 児童の特性を理解したり、児童の思考を深めたりするための「見取りの目と教師の出」の質の向上を学校全体で目指していく。
- 単元の計画とゴールを児童と共有し、個別最適な学びと協働的な学びを単元全体で一体化させていく。
- リフレクション（振り返り）による、次時への課題意識向上をねらう。まずは文章量を増やすところから始めて、徐々に内容の質を高めていく。

（軽部 亜希子）

## I 研究主題

深い学びの実現を目指して  
～単元デザインを核とした授業づくり～（2年次）

## II 主題設定の理由

本校は、「ふるさとを愛し、未来をしなやかに生き抜く谷地南部っ子の育成」を学校教育目標に掲げ、「言葉」「自立」の経営キーワードをもとに教育活動を推進している。

学校教育目標と本校の児童の実態を踏まえ、研究テーマを昨年度に引き続き、「深い学びの実現を目指して～単元デザインを核とした授業づくり～（2年次）」と設定した。

昨年度までの取組みで、各学年の思考力や「かく力」の伸びが見られ、大きな成果を得ることができた。しかし、一方で、さらなる学力向上に向けて、学ぶ意欲や粘り強さ等の個人差の拡大、基礎基本の未定着といった課題も残っている。そこで、「かく力の育成」

「主体的な家庭学習」「個に応じた単元デザイン」の研究視点を重視しながら授業改善を継続することで、誰一人取り残すことなく学力の向上を目指すため、上記のような研究テーマを設定した。

## III 研究の実際

### 第2学年 算数科「九九をつくろう」

☆学校研究とかかわらせて（教師の手立て）

#### ①見通しを持って主体的に学習に向かうために

毎時間の学習の流れをパターン化し、子どもたちが見通しを持って学習を進めることができるようにした。また、子どもたちの気づきを丁寧に取り上げ、授業展開に反映させていくことで児童の主体的な学びの環境をつくることができた。

#### ②個々の学びをそれぞれに深めるために

自力解決の時間においては、個人・ペア等、学習の進め方を自己選択させるとともに、ペア交流の場も認めることで、子どもたちが交流を繰り返しながら多様な解決方法に触れたり、説明し合ったりすることで一層理解を深めたりできるようにした。その際、自分の課題に合わせて交流相手を自己選択できるように、ネームカードを活用し、目的を明確にした交流を図ることができた。

（実践の考察）

○導入で子どもたちを引きつけることができ、解決に向かう必要感のある課題設定を行うことができた。

○子どもたちが目的をもって交流の仕方等を自己選択できた。



- ▲「かく活動」の充実をもっと図る必要を感じた。算数ならではの用語を活用しながら説明を書かせることで、より確かな学力につなげたい。
- ▲かけ算を使うことの良さをみんなで共有するために、「どうしてかけ算を使うのか」、「この考え方のどこに良さがあるのか」をしっかりと吟味させたい。  
→身近なもので使える場面を多く設定していく。

## 第6学年 国語科「宮沢賢治作品の世界にどっぷり浸る、「推し本トーク」をしよう。

### 「やまなし」 【資料】「イーハトーヴの夢」

☆学校研究とかかわらせて（教師の手立て）

#### ①読む力と言語化する力を育成するために

物語の全体像を具体的に想像したり、表現の工夫や効果を感じさせたりしていくことを単元全体として意識した。また、学習の見通しを持って作品世界について考えたことを交流させた。

#### ②比べて考える力を育成するために

作者の人生観を理解し、他の作品と比較したり作品の世界観から想像を広げたりして、作品に込められた思いについて考えられるようにした。

また、自分の考えを伝えるだけでなく、友達の考えと比べて共通部分や違う部分について考えられるようにし、自分の読みの深まりを実感することができた。

（実践の考察）

○推し本トーク（読書会）の方法を示すため、モデル動画を事前に見せていたことが効果的だった。

○自分の本との共通点を見つけたり、作者が作品に込めた思いなどを考えたりしながら交流することができた。

▲推し本を紹介する時に、あらすじや内容の説明をすることで精一杯の児童が多かった。

→同じ本を読んだ人同士の交流にしたり、本の種類を絞ったりするとより活発な交流になるのではないかな。

▲読書経験を増やしていきたい。読書量の確保と、系統性を意識した言語指導が大切であることを再認識した。



## IV 成果と課題

○特別支援教育の視点を意識しながら、個に寄り添った単元デザインを行うことができた。

（学級の実態をより適正につかむ力の向上にもつなげることができた）

○深い学びにつなげる活動を経て、「なぜ」「どうしてそう考えたか」を言語化できるようになってきた児童が増えてきた。

▲来年度の授業改善の視点の1つとして、長い文章を書いたり読んだりする力をさらに育てていく。特に、相手や目的に合わせた文章を構成する力や、言葉で相手に説明したり伝えたりできる力の育成を目指していきたい。

（田口 新）

## I 研究主題

一人ひとりが 自分らしく育つ授業づくり

## II 主題設定の理由

本校の学校教育目標「一人ひとりが自分らしく育つ学校づくり」実現に向けて、全ての子どもの学びを保障することが重要だと考え、この研究主題を設定した。子ども一人ひとりの学びを把握した上で必要な支援を判断すること、子どもの思考の流れを大切にし、子どもと共に授業をつくること、そして、ICT機器の活用により個別最適な学びを実現することを目指している。

また、「自分らしく育つ」とは、「自分で考え、決定して行動できる」ことをねらいとしている。自分の思いや考えを言葉で伝わるように表現し、さらに子ども同士が話し合いを進められるようにしたいと考えた。根拠をもとに説明し、論理的な思考で課題を解決していけるような学習の支援の仕方を工夫していく。そうすることで、言葉を通して双方向につながり、仲間と学び合う楽しさを味わい、学びを深めようとする態度を育てられると考えた。

## III 研究の実際

### 1 授業の実践

#### (1) 5・6年特別の教科道徳 資料「うばわれた自由」A 善悪の判断、自律、自由と責任

「自由」について、自由度を数値化して表現させる活動を取り入れた。数値で示すことで、自分の考えを明確にするとともに、友達との比較が可能となり、意見交流の活性化につながった。しかし、自由の定義が子どもによって異なっていたため、「良い自由」と「悪い自由」といった表現が子どもから出され、本時のねらいとはややずれる結果となった。数値化の意図や有効性について、教師自身がより深く理解して活用する必要を感じた。

#### (2) 3・4年音楽科 「音のとくちょうに注目して、音楽をつくろう」

打楽器の音を生かして、4パターンの鳴らし方を組み合わせ、テーマに沿った音楽をつくった。ICT機器を使い、3種類の打楽器のリズムパターンを変えながら、重なり合う音を合奏した。聴こえる音がテーマに近づくよう、いろいろな楽器を試しながら打楽器音楽をつくっていった。鳴らし方を工夫す



ることで、「〇〇みたいだ。」「強弱をつけたらどうだろう。」など、子どもたちが自由に試すことができる楽しさがあった。

### (3) 2年学習室国語科 「ペープサートを使って順序よく友達に伝えよう」

自立活動でペープサート作りに取り組み、これまでの学習との関連を意識させた。国語では、出来上がったペープサートを黒板に並べて話の流れを確かめた。絵と話の流れを結びつけることに興味深く取り組む姿が見られた。「はらぺこあおむし」の3つの場面に関心をもち、あおむしの動きや言葉を一緒に考えることに取り組んだ。



### (4) 2年算数科 「九九をつくろう」

かけ算の長い単元を、楽しみながら学んでいけるようにしたいと考え、子どもたちにとって遊び感覚で学べる活動や環境を工夫した。サイコロを振って出た目の数だけ九九を言ったり、九九ビンゴをしたり、九九を唱える場所や回数を自分で選んでいく「九九修行の旅」などを行ったりした。

九九を覚えることに不安のあった子どもも、楽しみながら九九に親しむことができていた。また、生活の中からかけ算の式に表せる場面を見つける活動を行い、生活とのつながりを感じることができた。

### (5) 1年国語科 「すきなところをしらせよう」

「たぬきの糸車」の学習と共に、いろいろな昔話を読むことに挑戦した。1年生にとって難しいのではないかと思ったが、子どもたちが知っているお話もあり、意欲的に読書する姿が見られた。しかし、子どもたちは、内容の大体を捉えてから好きなところを選ぶのではなく、挿絵や一部分を読んで選んでしまっていた。物語の全体のおもしろさを読み取れるような学び方を工夫したいと感じた。



## IV 成果と課題

○子どもの意欲を大切にして授業を考え、子どもたちと共につけたい力を共有したことで、見通しをもって学習に向かうことができた。

○子どもも教師も「関わり」を大切にして、授業や学校生活に取り組んできたことで、周囲の人々と協力して考え、意欲的に課題に向かうようになってきた。また、その関わりから学びを広げることができた。

▲今年度の校内授業研究会では、国語や算数の複式授業を取り上げなかったが、子どもが主役で子どもたちがつくっていくような複式の授業のあり方を考えていきたい。

( 原田 幸江 )

## I 研究主題

「生き生きと学び続ける北谷地っ子」の育成  
 ～ 一人ひとりがしっかり考え、みんなで学びをつないでいこう ～

## II 主題設定の理由

本校は、研究テーマを「生き生きと学び続ける北谷地っ子の育成」と設定した。「生き生きと学び続ける」とは、子どもたち一人ひとりが学習のめあてや課題をもち、進んで追究し、自分の考えや思いを積極的に表現して、互いのよさを認め合い、また新たな課題に取り組んでいくことが繰り返される学習ととらえた。

これまでの児童の実態から主題に迫るために、また、子どもたち一人ひとりが進んで学習に取り組むために、これまで同様、課題をしっかりと把握できるように工夫を行い、今まで学んだことを活用して自分の考えを持つことができるような授業づくりを目指していく。さらに、根拠を基に自分の考えを友達と伝え合ったり、自分達の考えに疑問を投げかけたりする話し合いを通して、考えを広げたり深めたりできるようにして、研究主題の実現に迫っていくこととする。

## III 研究の実際

### 1 研究の方法

- ・次の2つの視点を設け、研究・実践を推し進めた。

視点① 一人ひとりがしっかり考えていたか

視点② みんなで学びをつないでいたか

- ・各自が選んだ重点研究教科の授業を公開した。
- ・事後研究会では、2つの視点について児童の姿をもとに話し合いを進めた。
- ・学期末に「授業チェックシート」を活用し、指導者が自己の授業を振り返り、成果と課題を見つけ、授業改善に生かした。
- ・全国学調の問題を分析し、授業改善について話し合い、改善のポイントを共通理解した。



### 2 授業の実際

学年	教科と単元	主な成果 (○) と課題 (▲)
一年	生活科 「きたかぜとも なかよく なれるよ」	○前時の振り返りを思い出しながら本時の導入を行い、自分のめあてをしっかりと持って45分間集中して学習することができた。さらに、「もっとやりたい」ことが児童の中に生じ、活動の見通しをもつなど、次時への意欲につながった。 ○子どもたちに自己決定させたり、子どもの思いを引き出す問いかけをしたりしたことで、子どもたちが自分のアイディアや思いを言葉にして表現することができた。 ▲「比べる」「見つける」などの視点をより意識させ、気づきの質が高まるようにするために、教師も一人の学び手として、子どもたちと同じ目線で活動し、問いを投げかけるようにしたい。
二年	算数科 「九九を作ろう」	○ノートや掲示物を活用することで、一人ひとりが立式し、考え方を交流することができた。また、タブレットやホワイトボードを活用することで、自分と友達の考え方の類似点、相違点がわかりやすく、意味のある交流ができた。 ○自分と違う考え方にふれたとき、それを実物进行操作して受け入れようとする姿がみられた。 ▲子どもたちが自分の考えを持って交流に臨めるよう、既習の学習が生かせるような授業づくりや掲示、ノートの取り方などを工夫していくことが必要である。

三・四年 複式	<p><b>算数科（3学年） 「わり算を考えよう～あまりのあるわり算～」</b></p> <p>○全員が自分の考えを書いていた。式だけでなく、図を描いたり式に単位を書き加えたり、わかりやすいように工夫していた。</p> <p>○学習リーダーが、他の児童に答えや解き方を確かめながらまとめを行い、自分たちで問題を解決するところまで進めていた。</p> <p>▲問題文の文言だけにとらわれず、問題場面を理解し、立式や答えの意味を考えて解いていけるようにしたい。</p>
	<p><b>算数科（4学年）「およその数の表し方と使い方を考えよう～がい数の表し方と使い方～」</b></p> <p>○問題場面のイメージをもち、自分の考えを理由も加えて書き表すことができた。</p> <p>○学習リーダーがみんなの考えを引き出しながら話し合いを進めていた。なんとかして自分の言葉で伝えようとしていたり、相手の意見に対して考えを伝えたりしながら話し合いを進めている姿が見られた。</p> <p>▲話し合いが停滞する場面があったが、複式授業のため担任が入れなかった。複式授業で進めることを考え、直間指導の組合せ、提示資料の吟味、滞った話し合いを進める時のヒント等、自分たちでできるための手立てをさらに考えていきたい。</p>
五年	<p><b>算数科 「単位量当たりの大きさ～比べ方を考えよう（1）～」</b></p> <p>○課題を解決するための方法や調べ方などを自分で選択することで、一人ひとりが見通しを持って意欲的に取り組む姿が見られた。</p> <p>○一人ひとりの考えをグループ交流で出し合うことで、一人では気づかなかった考えに気づいたり、「なんで？」と気軽に友達に尋ねたりして学びを深めることができた。</p> <p>▲全体交流の場でも、友達の考えと比較しながら聞けるようにしたい。</p>
六年	<p><b>算数科 「割合の表し方を調べよう」</b></p> <p>○教科書や自分のノートを活用して、課題に取り組むことができた。</p> <p>○一人ひとりの考えをグループで確認し、アイデアを出し合いながら、答えに近づいていく話し合いができていた。</p> <p>▲考えを図や式で表すことができたが、その数字が何を表しているのか理解できていなかったのので、図や式に言葉をつけて説明ができるようにしたい。（可視化）</p>
きょう から （五年）	<p><b>社会科 「くらしを支える食料生産」</b></p> <p>○地理的な問いかけに対して県名とその位置や特産物をつぶやくなど、既習内容と関連させながら発表する姿が見られた。</p> <p>○くらしの写真を白地図に貼ることで食料の生産地を視覚的にとらえることができた。</p> <p>▲地図帳の巻末資料や図書の書籍や資料を活用し、その中から必要な情報を選択したり収集したりして処理する力も育てていきたい。</p>

#### IV 成果と課題

- 本時の流れやゴールを明確にした授業づくりをしたり、学習の積み重ねがノートや教室の掲示物にあり、それらを活用したりしたことで、見通しを持って課題に取り組むことができた。
- 学級が落ち着いて、何でも聞き合える人間関係が土台となって、思いや考えを出し合うことが多くなった。友達の発言に耳を傾けて、聞いて反応してくる子どもの姿も見られた。
- ▲自分の思いや考えを友達に伝える場を積極的に設定することができたので、「伝える」だけでなく、「問い返し」を通してさらに話し合いを深められるようにしたい。

(布川 美智子)